

暮らし見つめて

シニア発明家続々

商品化で特許出願も

ちょっとしたアイデアで生活や趣味を豊かにできる発明が、中高年の人たちに人気を呼んでいる。各地で開かれている発明法などを学ぶ講座の受講生の大半は中高年だ。中には商品化されて、利益を収める人もでてきた。
(小形佳奈)

協力して「楽書さん」を作る網代仁子さん(右)と夫の強さん(左)玉県戸田市で



や、企業への売り込み方法などを学んだ。

道具は昨年八月、横浜市の釣り具メーカーから「ハズシタロウ」(千五百円)の名で販売された。筒の中に釣り針が付いたままの魚を入れ、上部のふたを閉じると、針が外れて魚が筒に落ちるよう工夫されている。特許出願中で、内田さんにとっては初の発明品。

サビキ釣りの仕掛けの煩わしさを何とかしようと、定年

一個売れることに、一定の「実施料」が内田さんに入る。「試作のためにホームセンターで買った材料費の約四万円は取り戻した」と笑顔をみせる。今後は、より大きな魚が入る道具を開発していくという。

練馬区の網代仁子さん(左)の発明は、夫への思いやりが

「定年後、世間から離れたしまふ不安があったが、今は、発明が仕事の延長のようで、やりがいを感じる」
こう語るの

は、神奈川県大和市の内田俊雄さん(左)だ。釣りが趣味の内田さんは、釣り針

とさん付いたサビキ釣りの仕掛けにかかった魚を触らずに簡単に外せる道具を発明した。

退職後に三年ほど試作を繰り返して開発した。その後、発明学会(東京都新宿区)のセミナーに参加して特許出願

障害者用の補助具

女性の生活密着型

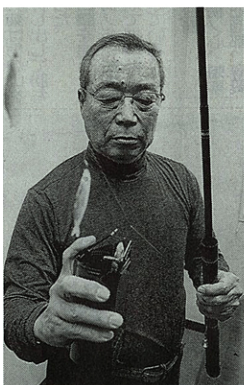
出発点。埼玉県戸田市で、家族で営む金属加工の仕事中に右手を負傷して障害がある夫の強さん(右)のために二〇〇八年暮れ、筆記補助具「楽書さん」を編み出した。

都内で開かれた婦人発明家協会(文京区)の作品展を見て「自分も何か」と一念発起。木材を手で握るのに適した大きさに丸く削り、親指が

当たる部分にくぼみをつけ、ペンを通す穴を設けた。仁子さんのアイデアを、強さんが

一九五四年の設立以来、これまでにな事務用のクリアファイル束を束ねるのに持ち手や付いた水櫃のコケ落としなど、三十二件以上の会員の発明が商品化されている。

学校の問い合わせは発明学会 電話03(53366)881



サビキ釣りの魚を簡単に外せる道具を発明した内田俊雄さん(東京都新宿区)

発明学会専務理事の中本繁実さん(左)は、男性は趣味に関する

性は趣味に関する

家事や育児、介護のための発明が多い」と話す。同様の学校は横浜市や名古屋市、三重県鈴鹿市などでも開かれている。

工場機械を使って形にした。

●九年の婦人発明家協会の作品展に出品して厚生労働大臣賞。以降、主に受注で販売を始めた。一個二百円から。当初は滑らかに書けるように底に金属の玉を付けていたが、「複写式の書類に玉の跡が写る」と指摘され、強さんの発案でフッ素樹脂に替え

夫婦で身体障害者施設を見学し、握力や指の開き加減も人により違つことを知り、持ち手の形を五種類作った。木の温かみと書きやすさが好評で、まとまった注文も入るようになった。「不便な思いをしている人を知りたい」と喜ぶ。特許を出願した。

発明学会は毎月第三日曜日、新宿区の同会で「日曜発明学校」を開催している。受講生は毎回約百人。このうち八割が中高年だ。発明のこつを先輩発明家から学び、自分を先確発明家として評価を受ける内容だ。

1へ。